

メインライン教会と新宗教右翼

——アメリカ・キリスト教界の現状と展望——

森 孝 一

はじめに

昨年11月の米国における中間選挙は、民主党の圧勝に終わった。民主党はこの勝利を「レーガン革命の終焉」と称して、アメリカ政治の潮流がはっきりと変化したことを宣言した。中間選挙結果とそれが意味することがらについての分析は専門家にまかせるとして、政治におけるこのような変化を、1980年代に入ってから顕著となってきたアメリカ社会の保守化傾向の終焉ととらえてよいのかどうかは、難しい問題であると思われる。確かに米国国民は軍備の極端な増強と、福祉の切り捨てというレーガンの政策に批判を加えたが、1980年代の保守化をもたらしたアメリカ社会の潮流が変化しはじめたと考えることは、現時点においては早計であるように思われる。例えば麻薬の蔓延とそれともなう凶悪犯罪の増加は、今日なおアメリカ社会の重大な社会問題である。先の中間選挙と同時に行なわれたカリフォルニア州の最高裁判事に対する信任投票で、死刑反対を信念としてきたローズ・バードが罷免されたことは、保守化傾向の終焉をあまりにも単純に宣言することに対するひとつの反証ではないだろうか。

社会の潮流の変化は急におこるものではない。社会変動はそれを生みだしてくる長期間の準備の段階があって、はじめて可能となるのである。この一、二年のアメリカ社会の傾向は、後に述べるように極端な保守的政策に対する嫌悪

※本稿は1986年4月1日、国際基督教大学で行なわれたアメリカ学会・第20回大会のシンポジウムでの発題の内容を加筆文章化したものである。

感は見られるものの、全体としてはなお保守的傾向を示しているように思われる。

1985年9月と1986年2月に、二人の保守派の牧師が雑誌 *TIME* の表紙を飾った。ひとりには保守的宗教者による政治団体であるモラル・マジョリティ（道徳的多数派）の会長である Jerry Falwell¹⁾ である。彼は一昨年8月、短期間ではあったが南アフリカ連邦を訪問し、帰国後、南アフリカ政府の立場を支持して、ツツ主教は南アフリカ黒人の多数意見を反映しておらず「偽者 (phony) である」とテレビで発言して物議をかました。モラル・マジョリティは本来アメリカ合衆国の国内問題、とくに道徳問題 (moral issues) について、強力に発言しロビー活動を行なってきた。しかし、南ア問題についての発言の後、Falwell 牧師は外交問題に積極的に意志表示を行なうように変化してきている。昨年1月初めには「自由連合」(Liberty Federation) を結成し、反共的外交をめざしている。自由連合の結成にともない、モラル・マジョリティの副会長の Ron Godwin と、Falwell 牧師が理事長をつとめているリヴァティ大学の副学長の Bill Paul は、それぞれ職を辞して米国の統一教会 (Unification Church) が所有している日刊紙ワシントン・タイムズが発行しようとしていた週刊紙 *Insight* のために働くこととなった²⁾。これは同じ反共政策をめざす二つの組織の人的交流を物語るものとして注目に値する出来事である。

Falwell 牧師が *TIME* の表紙に取り上げられたことは、ファンダメンタリストと一般に呼ばれている超保守的キリスト者の政治参加が、今日のアメリカ社会において無視することのできない社会現象であると受けとめられていることを示していると言えるだろう³⁾。

昨年2月、*TIME* の表紙に取り上げられたのは Pat Robertson 牧師である⁴⁾。彼はいわゆる「テレビ説教家」のチャンピオンである。テレビを通じて伝道を行なう「テレビ教会」は、今日のアメリカ・キリスト教界の最も特徴的な現象である。Robertson 牧師はヴァージニア州ヴァージニア・ビーチ市に自分のテレビ局を持ち、トーク・ショー形式の人気宗教番組である「セブンハンドレッド・クラブ」を毎日、制作・放送している。同時に彼は CBN (Christian Broadcasting Network) というケーブル・テレビの全国的ネットワークを持ち、

全米の1630万家庭を視聴者として持っており、年商は約370億⁵⁾円である。彼が *TIME* の表紙に取り上げられたのは、1988年の大統領選挙に共和党から出馬することを正式に表明したためであったが、*TIME* はその機会にあらためてテレビ教会の現状とその力を紹介したのである。

以上の二つの例は、今日のアメリカ・キリスト教界の特徴をはっきりと物語っている。本論文はテレビ教会と、その説教者による政治参加という今日のアメリカ・キリスト教界の最も特徴的な現象を、アメリカの宗教状況全般、特にメインライン教会と呼ばれる諸教派との関係で位置づけ、アメリカ・キリスト教界の現状と今後の展望を分析しようとするものである。

1. メインライン教会とは何か？

メインライン教会という用語は、上に述べたような保守的キリスト教会に対して、リベラルな立場をとる諸教派を意味するものとして、一般的には使われている。具体的には N.C.C. (National Council of Churches) および W.C.C. (World Council of Churches) の中核をなす諸教派を指すものと考えられてきた。しかし、近年この用語の使い方について、アメリカ宗教の研究者は、その内実と名称について慎重な態度を取っているようである。例えば、昨年4月、日本アメリカ学会のために来日した Harvey Cox は、今日のアメリカ・キリスト教界を7つのグループに分類し、そのひとつを「メインラインまたは今日『オールドライン』と呼ばれるべきプロテスタント⁶⁾」と呼びかえている。メインラインとは本来「本線」を意味する鉄道用語であり、今日もなお、宗教用語としては主要な辞書には出ていない。宗教用語としてのメインラインの語源としては、かつてペンシルヴェニア鉄道の「本線」が、フィラデルフィア郊外の貴族的地域を走っていたことから由来したものと考えられている⁷⁾。すなわち、メインライン教会とは、単に会員数において多数派であるばかりでなく、エスタブリッシュメントという用語と同様に、特権階級的意識を含んだものであった。アメリカ人の意識としては、メインライン教会とは社会の各分野でエリート的な立場にある人びとの多数が所属している諸教派を意味する用語であると考えてよいだろう。

用語の意味するところは以上の通りであるが、メインライン教会の内実、すなわち具体的にどの教派がメインライン教会に含まれるかは、固定的にとらえるよりも、時代とともに変化してきたととらえる方が現実に即しているように思われる。

メインライン教会という用語が宗教用語として使われていなかった時代においても、それが意味する特権的意識は植民地時代から存在していた。植民地時代には英国国教会、会衆派教会、長老教会が実際的にはメインライン教会を形成していた。19世紀初頭のフロンティアへの拡大と、それにとともなる第二次信仰復興期を経て、メソジスト教会、バプテスト教会、ディサイプル教会 (Disciples of Christ) がメインライン教会に加わっていった。ユニテリアンは数としては少数派ではあったが、文化的・社会的評価としてはメインラインを形成していた。南北戦争による教派の分裂後は、バプテスト教会、メソジスト教会、長老教会については北部のそれがメインライン教会として受けとめられた。

19世紀後半から1920年代にかけて、大量の新移民がアメリカに移住し、カトリック、ルーテル教会の信徒が増加したが、社会・経済的地位という点では、この段階では未だメインラインを形成してはいなかった。1920年代はメインライン教会、とくに北部バプテスト教会と北部長老教会において、ファンダメンタリストと近代主義者が激しく対立した時代であった。⁸⁾ 争点は自然科学、社会科学における新しい時代の波に、キリスト教は如何に対応すべきかという点であり、具体的には聖書解釈の方法と進化論をめぐるものであった。この点で、今日のファンダメンタリズムをめぐる状況と共通点が見られる。今日の進化論をめぐる状況について述べると、公立学校において進化論とともに聖書の創造の教え (creationism) を教えるべきであるという法律が、アーカンソー州とルイジアナ州ではすでに成立しており、1982年の段階でさらに29の州において法案が審議されている。⁹⁾ 1920年代のファンダメンタリスト論争は、アメリカ社会の中心 (public center) をどちらの立場をとる人びとが握るかという「時代の支配的思想」をめぐる論争であったと言えるだろう。結果的にはファンダメンタリストはメインライン教会の主流とはなり得ず、1930年代にはそれまでの教派

を脱退して新しい教派を設立した。以後、1970年代末まで、メインライン教会の主流はリベラル派が占めることとなった。

第二次大戦後、特に1950年代は東西冷戦下の状況の中で、ファンダメンタリストがマッカーシズムに協力したことへの反省から、メインライン教会を形成する各教派は、エキュメニカル運動と平和運動をその活動の中心にすえていった。教派としては、カトリック、ルーテル教会、ユダヤ教が、それまでの新移民の宗教からアメリカ化し、信徒の社会・経済的地位の向上とともに、メインライン教会の一翼をになっていくこととなる。特に、1960年の大統領選挙で、アイルランド系でカトリックのジョン・F・ケネディが選出されたことは、アメリカ社会においてカトリックがメインライン教会の一部となったことの証明となった。

公民権運動とベトナム反戦運動の時代、1960年代には、メインライン教会は益々リベラルな色彩を強めていった。メインライン教会内の保守派の人びとは、1930年代に独立したファンダメンタリストのファナティックな姿勢から自らを区別して、「エヴァンジェリカル」(福音派)を名のつた。1960年代には、エヴァンジェリカルはメインライン教会内においては未だ少数派であり、教派の主導権を取ることはできず、教派とは別の運動体(Parachurch)、特に大学生、高校生を対象とする伝道団体を自分たちのアイデンティティの場としていた。¹⁰⁾

1970年代のアメリカ・キリスト教界の際立った特徴は、メインライン教会のメンバーの減少と保守的立場をとる諸教派のメンバーの増加である。次の表はカトリック以外の教派を信徒数の多いものから順に10位まで並べたものであり、パーセントは1970年と1983年の増減を比較したものである。¹¹⁾ただし、合同メソジスト教会の資料は1982年のものである。

南部バプテスト連盟	14, 178, 061	+22%
合同メソジスト教会	9, 405, 164	-11%
アメリカ・長老教会	3, 122, 213	-23%
モルモン教会	2, 930, 000	+41%

在米ルーテル教会 (Lutheran Church in America)	2,925,008	- 6%
聖公会	2,794,690	-15%
ルーテル教会・ミズリー会議 (Lutheran Church, Missouri Synod)	2,630,947	- 6%
アメリカ・ルーテル教会 (American Lutheran Church)	2,343,412	- 8%
連合キリスト教会 (U. C. C.)	1,701,513	-13%
アッセンブリー・オブ・ゴッド	1,153,935	+85%

保守的教派の会員数の増加と、リベラルなメインライン教会の減少の他に、メインライン教会内においても福音派の人びと (mainline evangelicals) が増加したことも1970年代の特徴である¹²⁾。1970年代末には、メインライン教会内のリベラル派と福音派の勢力が均衡してきた。1960年代には、リベラル派一辺倒であったメインライン教会の中から、新保守主義 (Neo-conservatism) の立場をとる人びとが現われてきたのも1970年代であるが、この人びとについては後に改めて述べることにする。

1980年代はレーガン大統領の登場をもって始まった。1980年の選挙において、いわゆるファンダメンタリストと呼ばれるテレビ説教家が積極的に政治に関わっていった。レーガン自身が自らをファンダメンタリストと自己同一化していることを公言するという事態は、アメリカ社会の中心点 (public center) が保守化したことを明らかに物語るものである。1980年代のアメリカ・キリスト教界のもうひとつの注目すべき現象は、保守的教派の内部における立場の違いが明らかになってきたことである。この対立は穏健な保守派 (evangelicals) と超保守派の新宗教右翼 (New Religious Right) の対立である。南部バプテスト連盟における両派の勢力はここ数年ほぼ拮抗しており、穏健派の人びとは自らを「保守本流」 (mainline conservatives) と呼び、対立する相手を「超保守派」 (ultra-conservatives) と呼んで区別している¹³⁾。これはメインラインという用語の用法としては興味ある事例であるが、南部バプテスト連盟は南部においては、19世紀中葉以来、メインライン教会でありつづけてきたことを考えれば、特異な用法というわけでもないだろう¹⁴⁾。

さて以上のように、メインライン教会の内実の変化を概観してきたが、J・

F・ケネディの大統領就任がカトリック教会がメインライン化したことのシンボルであったように、カーターの大統領就任は南部バプテスト連盟およびエヴァンジェリカルのメインライン化を象徴するものであった。さらに1980年の大統領選挙においては、最後までこの選挙を争ったレーガン、カーター、アンダーソンの三人が、いずれも聖霊による回心体験 (born again) を重視する保守派のキリスト者であったことは、アメリカ社会の中心 (public center) が変化¹⁵⁾していることを暗示している。

伝統的な意味でのメインライン教会は、19世紀と20世紀の大半にわたって、アメリカ社会の中心に位置してきた。しかし、この10年余りの間に、メインライン教会の社会的位置に変化がおこってきた。この原因として、Robert Bellah はメインライン教会の指導者がアメリカ社会の一般的文化 (general culture) から遊離してしまい、自分たちの言語が通じる領域においてだけ発言する専門家になってしまった点をあげている。¹⁶⁾ この問題は重要であると思われるので、後に改めて考察してみたい。

1970年代以降、今日までのアメリカ・キリスト教界の特徴的な現象について、今まで概観してきたが、これを伝統的なメインライン (あるいはオールドライン) 教会の低迷と保守的教派の発展としてとらえるよりも、新たなメインライン教会の形成過程としてとらえる方が、より現実に即しているのではないだろうか。

2. 保守的キリスト教の発展の背景

テレビ教会の発展は、一見メインライン教会の低迷の原因であるかのように思えるが、実は反対に、人びとがメインライン教会から得られなかったものをテレビ教会に求めた結果であったと思われる。教会出席率はテレビ教会の出現とともに低下したのではなく、最近10年間はほぼ横ばいであり、またテレビ教会の視聴者の内分けを見ると、教会への関わりが高くなるにつれて、より頻繁にテレビ教会を見ているということが調査結果にあらわれている。¹⁷⁾ 人びとは従来の教会の代りにテレビ教会を選んだのではなく、従来の自分の教会に加えてテレビ教会を自分のものとしたのである。すなわち、従来のメインライ

ン教会が近年人びとに与えることに失敗していたものを、テレビ教会と新宗教右翼は人びとに提供していると言えるのではないだろうか。それでは、このような現象の背景となっているアメリカ社会とアメリカ・キリスト教界の現実について次に考えてみたいと思う。

アメリカ社会における宗教は、個人的レベルにおいてだけでなく、公的・社会的（public）レベルにおいても重要な役割を担っている。次にこの二つの側面から、保守的キリスト教の発展の背景について考えてみたい。

まず、私的・個人的領域について考えてみよう。1960年代の対抗文化は、個人的な生活様式（life style）の新しい試みであった。しかし、今日、アメリカの大多数の人びとは対抗文化が生み出してきた生活様式について、否定的な評価を下しているように思われる。離婚の増加とともに、新しく生まれてくる子供の40パーセントは母親だけの家庭に生まれており、大きな社会問題となっている子供の誘拐の大部分は、離婚して子供と離れて生活している実の親によるものである。ドラッグの使用の拡大は犯罪率の上昇を生み出している。ホモセクシャルに対しても、エイズの流行とともに否定的評価が強まっている。このような社会問題の背後には、失業などの政治的・社会的要因があるのは事実であるが、アメリカ人はこれを宗教的・道徳的状況と結びつけて考える傾向が強い。1985年の調査によれば、61パーセントの人びとは、宗教によって今日の社会問題の大半あるいは全てが解決すると答えている。¹⁸⁾

新宗教右翼の主張の中心は、以上のような対抗文化が生み出した生活様式にむけられている。すなわち、中絶、ポルノ、ホモセクシャル、男女同権法案（E. R. A.）などのように、伝統的なアメリカの家庭のあり方とそれを支えてきた価値を脅かすものに対して反対していくという主張（pro-family）である。このような新宗教右翼の主張は、アメリカの世論をある程度反映しているように思われる。1985年に13歳から18歳の若者を対象として行なわれた調査によると、86パーセントが伝統的な家族の結びつきが強調されるべきであると答えている。¹⁹⁾1979年の調査によれば、子供と共に家庭において、なんらかの宗教行動を行なっている親の割合は、われわれ日本人の想像をはるかにこえており、約四割の親が子供とともに、調査が行なわれた前週の礼拝に出席してお

り、44パーセントの人びとは子供とともに、神や宗教について話し合っていたという結果が出ている。²⁰⁾

対抗文化のひとつのシンボルであるマリファナについても、最近大きな変化が見られる。1982年に行なわれた調査によれば、マリファナの使用とフリー・セックスについては、若者とおとなの間ではその許容度について大きな違いが見られた。²¹⁾ところが、1985年の調査では、今日の若者はフリー・セックスに対しては高い許容度を示しているが、マリファナについてはこの3年間にその許容度は半減している。²²⁾新宗教右翼の主張の全てに対して、アメリカの世論は賛成しているわけではない。しかし、アメリカ人の多くの者は今日の社会問題を生み出したものは、対抗文化が生み出した生活様式であると考えているのも事実であろう。メインライン教会とその指導者は対抗文化が生み出してきた生活様式の問題性について、ほとんど発言しないという形でそれを肯定してきた。このことがメインライン教会の力の減少と新宗教右翼の伸長のひとつの原因であったと考えてよいだろう。

次に、公的・社会的側面からこの問題を考えてみたい。日本のように目に見えない社会規範が機能している、あるいは機能していた社会と違い、アメリカ人は社会規範としてのはっきりとした道徳的・倫理的基準を求める傾向がある。先程の10代の若者に対する調査によれば、92パーセントがより強力な權威を求めている。²³⁾

先に1970年代において、メインライン教会内部がリベラル一辺倒から多様化してきたことを述べたが、そのひとつの動きが新保守主義(Neo-conservatism)であった。新保守主義は1970年代後半に現われた新しい政治的立場であり、ワシントンD. C.にあるアメリカン・エンタープライズ研究所というシンクタンクに集まった人びとがその中心である。²⁴⁾宗教の分野では、宗教社会学者のPeter Berger, カトリックのMichael Novak, ルター派の神学者Richard Neuhausがその代表である。彼らは1960年代にはリベラルの立場から発言を行っていたが、後に立場を変化させた人びとである。その理由の中心は、1960年代のリベラル派の人びとが、対抗文化と同じように、アメリカの伝統をトータルに否定したところにある。新保守主義の基本的立場は、「相対的に見て」、

世界におけるアメリカの影響は良いものであるという認識である。対抗文化のように、アメリカの伝統の総体を否定することは、社会規範の根本にある宗教的価値をも否定することであり、これは危険な状況を生み出しかねないと危惧するのである。Neuhaus は『裸の広場』(*The Naked Public Square*)において、この立場を次のように述べている。すなわち、「広場」(public square: これは本論文において、今まで「社会の中心」、public center と表現してきたものと同義である)が何の社会規範も存在しない「裸」の状態にある場合には、国家そのものを究極の価値とする国家主義が現われてくることを危惧しつつ、超越的なものへの忠誠を基本とする伝統的な宗教的価値を社会の中心に置くべきであると主張する。これは公的・社会的分野における「反」対抗文化の主張であると言えるだろう。Neuhaus は新宗教右翼の主張とある程度の共通点があることを認めながら、自らをメインライン教会と同一化しつつ、その主張と運動を展開している。

社会規範としての宗教的価値の問題が、今日、具体的な形で争われているのが、公立学校における祈禱あるいは黙禱の時間の復活をめぐる問題である。1962年と63年の最高裁の違憲判決を不服として、祈禱の時間を復活すべきであるとする人びとは、今日69パーセントにのぼっている。²⁶⁾

さらに、この問題を宗教が社会においてはたす機能という点から考えてみたい。宗教の社会的機能は統合作用と変革作用の二つに大別することができる。統合作用とは文字通り、社会を統合していく作用であり、変革作用とは国家・社会をこえる超越的なものへの忠誠と超越的視点から、現実を批判的あるいは否定的にとらえ、現状を変革していく作用である。二つの作用はいずれも欠点あるいは危険性を持っている。統合作用は自己絶対化と他者に対する排他性という危険性を持ち、アメリカにおいてはアメリカ至上主義あるいは文化的帝国主義を生み出してきた。変革作用の欠点は、安定性の欠如である。宗教の持つ変革作用が政治的変革を引きおこしたイラン、ニカラグア、フィリピン不安定性は、今日におけるその実例であろう。安定性を保ちつつ、継続的に自己変革をなしていく社会とその宗教が、健全な状態とすることができるわけだが、以上のような視点から1960年代以降のメインライン教会の低迷について考

えてみるとどうなるのだろうか。

1960年代のアメリカ社会における宗教は、変革作用が支配的であった時代と言えるだろう。すなわち、公民権運動とベトナム反戦運動および対抗文化の時代である。神学においても変革運動を前面に押し出した解放の神学が中心であり、この状況は今日にいたるまで変化していない。解放の神学はコンテクストを特に重視する神学であり、黒人、少数民族、女性などの被抑圧的状況が、この神学のためのコンテクストである。この場合、白人男性の神学者は重大な困難さを担うこととなる。すなわち、彼らが同一化するための被抑圧的状況の問題である。彼らは真面目な取り組みを経て、多くの場合、中南米の解放の神学の中に自らの神学の基礎を置こうとしているように思われる。Harvey Cox, Robert McAfee Brown はその典型と言えるだろう。²⁷⁾

イエスのメッセージの中心は、確かに既成の宗教を批判するという点において変革作用であった。しかし、キリスト教の歴史を考えるとコンスタンティヌス以来、国教としての歴史があるわけで、統合作用としての機能をはたしてきた。アメリカの場合も市民宗教 (civil religion) の研究が明らかにしてきたように、植民地時代から今日にいたるまで、聖書の宗教が統合作用として機能し、アメリカとアメリカ人に存在の意味づけを行なうための言語体系、象徴体系としての役割をはたしてきた。今日のメインライン教会の指導者と神学者は、この現実を軽視しすぎてきたのではないだろうか。

対抗文化は宗教の領域において、若者とインテリ層を中心として東洋宗教への興味を喚起し、キリスト教とは異質の宗教体験を提示してきた。個人的・内的な領域においては、これはアメリカの宗教状況におけるひとつの充実であったと言えるだろう。しかし、東洋宗教に魅せられた人びとの宗教生活を、公的・社会的側面において考えてみると、彼らの宗教体験に基づく新しいコミュニティは、社会的に彼らを開かれた存在とする方向には進まず、反対に自己完結的で閉鎖的な方向へと向わせた。

東洋宗教とは反対に、メインライン教会の解放の神学は公的・社会的側面の主張が中心であったが、アメリカ社会における諸問題を棚上げにしたまま、アメリカ社会や国家としてのアメリカを飛びこえて、第三世界あるいは人類一般

をコンテキストとして展開されたために、一般の信徒にとっては手ざわりの感じられない現実感覚のないものとなっているのではないだろうか。²⁸⁾1960年代の公民権運動においてキング牧師の主張が人種の壁を越えて広く支持されたのは、「私には夢がある」(I have a dream)という彼のことばに表わされているように、黒人の真の解放を黒人というある特定のグループの利益追求として主張したのではなく、アメリカ社会あるいは国家としてのアメリカにとっての夢として主張したからではなかつたらうか。キング牧師の主張と行動は、彼にとっての愛国心の表現であったのだ。今日も黒人教会においては、解放の神学は力強い現実として生きつづけている。

「虹の連合」(rainbow coalition) という美しい合い言葉のもとに、人種の壁を越えた連帯がリベラルなリーダーたちによって摸索されてはいるものの、信徒レベルの日常生活においては現状はいっこうに好転しているようには思えない。1960年代、対抗文化とともに現われた解放の神学は、伝統的なアメリカ・キリスト教に対する批判的視点を提示したが、新しい時代のナショナル・アイデンティティの核となる宗教的確信とはなり得ていない。この現実についてのフラストレーションが、メインライン教会の中心を形成している白人信徒たちの中に存在してきたように思われる。聖書の宗教(カトリック、プロテスタント、ユダヤ教)を信じる者が87パーセントで、68パーセントがその教会員である一方で、41パーセントの人びとが過去6ヶ月の間に一度も教会に行っていないという現実は、個人の内的救いととも社会規範の中心として、伝統的な宗教的価値を保持したいと望みながら、メインライン教会からはそれを得ることができていないという人びとの不満を表わしているように思われる。²⁹⁾このようなフラストレーションの中に現われ、急速に広がったのがテレビ教会であり新宗教右翼であったと言えるだろう。

3. 保守的キリスト教の現状

アメリカ・キリスト教界における保守派の勢力については、アメリカにおいてと同様にわが国においても注目され、くり返しマスコミも取り上げてきた。日米両国において、この保守的キリスト教を「ファンダメンタリズム」と呼ん

でいるが、その内実は一様ではないので、ここで簡単に整理を行なってみた。

1920年代にメインライン教会において起ったファンダメンタリストと近代主義者（モダニスト）の論争期のファンダメンタリストの主張は、聖書の無謬性に対する信仰に基づいてキリスト教にとって根本的（ファンダメンタル）な信仰内容を5ヶ条にまとめて主張するというものであった。すなわち、1) 聖書の無謬性、2) 処女降誕、3) キリストによる贖い、4) 体のよみがえり、5) 奇跡の真実性の5項目である。この5ヶ条とならんで、千年王国の到来に対する信仰も、ファンダメンタリズムを特徴づける要素であったが、1930年代後半には千年王国に対する信仰の強調の程度をめぐって、ファンダメンタリストの間で対立がおこり、教派の分裂をおこしている³¹⁾。

このような伝統的な意味でのファンダメンタリストに属する今日のテレビ説教家は、モラル・マジョリティの Jerry Falwell である。今日、一般的にファンダメンタリストと呼ばれている有力なテレビ説教家は、伝統的な意味でのファンダメンタリストではなく、ペンテコステ派あるいはカリスマ運動に属する人びとである。現在、最も多くの視聴者を集めている6人のテレビ説教家のうち、Falwell と改革派出身の Robert Schuller 以外の4人 (Pat Robertson, Jimmy Swaggart, Jim Bakker, Oral Roberts) はいずれもペンテコステ派である³²⁾。彼らはペンテコステ派の神学的傾向を反映して、ファンダメンタルな信仰箇条よりも聖霊の働きをより強調する。すなわち、異言と神癒 (healing) は聖霊の具体的な働きのしるしとして、ペンテコステ派のテレビ説教家にとっては不可欠のものであるが、伝統的なファンダメンタリストはこの両方を認めない。

今日、一般にファンダメンタリストと呼ばれる保守的キリスト者は、厳密に言えば以上の2つのグループから成っているが、彼らの他に、いわゆるファンダメンタリストの偏狭性を嫌ってエヴァンジェリカルと自称する保守派のキリスト者が存在している。南部バプテスト連盟はその中核を形成している。

今日のいわゆるファンダメンタリズムのひとつの特徴は、以上に述べたような神学的差異を問題にするのではなく、政治的・社会的問題において一致できる

点を探り、共闘していこうとしている点である。これはアメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史においては特異な現象であり、マスコミをはじめ一般的に、彼らを総称してファンダメンタリストと呼ぶようになった原因であると思われる。

それでは次に、ファンダメンタリストとエヴァンジェリカルの違いについて考えてみたい。ギャロップとプリンストン宗教調査センターは次の3つの条件を満たす人びとをエヴァンジェリカルと定義している。すなわち、1) 再生体験 (born again) があること、2) 他者への伝道を行なっていること、3) 聖書を直解的に読んでいること、である。³³⁾ この定義は妥当なものと思われるが、ファンダメンタリストもこの三条件に合致する人びとである。George M. Marsden はファンダメンタリストを「何かに怒っているエヴァンジェリカル」と定義しているが、これは適切であると思われる。³⁴⁾ すなわち、両者の違いは神学的理解の違いによるものではなく、自分たちと意見を異にする者に対する態度・あり方の違いにあるのである。ファンダメンタリストが怒っている対象は、1960年代以来の対抗文化あるいはリベラル派の人びとのあり方に他ならない。

今日のファンダメンタリストの特徴のひとつは、政治への積極的な参加である。それでは、ファンダメンタリストの政治行動を支持している保守的キリスト者の数は、いったいどれぐらいなのだろうか。先に紹介したギャロップとプリンストン宗教調査センターによるエヴァンジェリカルについての調査結果によると、再生体験を持つ者は40パーセント（以下のパーセンテージは調査の全サンプルに対する割合である。すなわち、アメリカの成人人口の全体に対する割合と考えてよからう）、伝道を行なっている者は48パーセント、聖書を直解的に読んでいる者は37パーセントであり、3つの条件を全て満たす者は22パーセントである。また同じギャロップとプリンストン宗教調査センターが行なった別の調査によれば、エヴァンジェリカルの約60パーセントの人びとがキリスト者は法案を通過させるために、議員に対してロビー活動を行なうべきであると答えている。³⁵⁾ 以上の2つの調査結果から推定すれば、エヴァンジェリカルの3条件を全て満たす者（22パーセント）の60パーセント、すなわち13.2パーセント

が少なく見積った場合の新宗教右翼の支持者数である。しかし、3条件のうちのひとつだけを満たしている人であっても、政治参加を肯定する場合もあるわけで、3条件の平均すなわち約40パーセントのうちの60パーセントが新宗教右翼の運動を支持しているとも考えられる。この場合が多く見積った場合の数値であると考えれば、新宗教右翼の潜在的な支持者は、全成人人口の13.2パーセントから24パーセントと考えてよいだろう。これは2600万人から4800万人に相当する。モラル・マジョリティに所属して積極的に政治活動を行なっている者の数は、モラル・マジョリティが自称するところでは650万人であるが、実際は約半分の300万人程度と見るのが妥当なところであると思われる。

次に新宗教右翼を支持する人びとの特徴について考えてみたい。1920年代のファンダメンタリストはごく僅かの例外を除いて、社会・経済的な意味で下層に位置する人びとであり、ポピュリスト運動の支持者と重なる部分が多いと考えられてきた。Richard Hofstadter はステータス・ポリティックスによってこれを分析している。³⁶⁾しかし、今日のファンダメンタリストについての Charles L. Harper と Kevin Leicht の社会学的分析によれば、新宗教右翼の支持者とメインライン教会のメンバーの間には、社会・経済的な意味での差違を見つけることはできず、1950年代の右翼的運動を分析する時に用いたステータス・ポリティックスは今日の状況には妥当しないと指摘している。³⁷⁾両者の間に見られる差違は教育程度の違いと、それにとまなう生活様式 (life style) についての傾向の違いだけである。すなわち、今日のファンダメンタリストの運動は、伝統的な中産階級的生活様式 (old middle class life style) を守ろうとする文化的・宗教的色彩の強い社会現象であると結論している。³⁸⁾これは最近の調査結果にもあらわれている。人びとは保守的キリスト者とリベラルなキリスト者の違いを生み出してくる原因について、育った環境の違い、教育レベルの違い、文化的嗜好の違いをあげており、経済状況や社会的地位については違いを認めてはいない。³⁹⁾

Richard Neuhaus はメインライン教会と新宗教右翼の対立の背後に、2つの階級 (class) の間の対立があると考えている。しかし、これはステータス・ポリティックスにおけるような経済的な意味での階級ではない。Neuhaus は

今日のアメリカ・キリスト教界における対立を二種類のエリート間の対立としてとらえている。すなわち、メインライン教会の指導者は「新しいエリート」(new elite あるいは new class) と呼ばれる人びとであり、経済的な意味での従来のエリート (old elite あるいは business elite) に対して知的エリート (knowledge elite) であると言う。メインライン教会の指導者に対して、新宗教右翼のリーダーとその支持者、およびメインライン教会の大半の信徒は従来の意味におけるエリート、すなわち経済的エリートに属する人びとであり、2つのクラスの間には考え方の違いが存在し、これがメインライン教会からの信徒の離反と新宗教右翼の伸長の原因であると考えている。⁴⁰⁾ Neuhaus は新保守主義の立場から、2つのクラスの間最大の相違点は、資本主義体制をも含めて、伝統的な意味でのアメリカ的なものをどのように評価するかという点にあると考えている。彼によれば、メインライン教会は本来アメリカ的なものを積極的に評価していたのであり、これに変化が現われてくるのは1960年代以降のことであると考え、メインライン教会が再びアメリカ的なものを評価すべきであると主張する。⁴¹⁾

4. 新宗教右翼の今後の展望

1930年代以来ごく最近にいたるまで、ファンダメンタリストとエヴァンジェリカルはメインライン教会の主流をしめてきたリベラル派に対する批判勢力として存在してきた。しかし先に述べたように、今日かつてのメインライン教会がメインラインとしてとどまることができず、保守的キリスト教が勢力を拡大している状況の中で、新宗教右翼がもし今後のメインライン教会の一部を形成していくとするならば、Marsden が指摘したような「何かに怒っている」批判勢力として存在するだけでなく、その時代の社会的・文化的潮流の中心を形成している人びとに受け入れられる具体的な主張を持つ必要があるように思われる。それでは次に、新宗教右翼が今日のアメリカ社会が直面している諸問題に対して発言している主張が、どの程度、人びとの共感を得ているかについて検討してみたい。

新宗教右翼が主張している社会的・道徳的問題のうち一般世論から広く支持

されているのは、公立学校における祈禱の時間の復活の問題だけである⁴²⁾。中絶に関しては、保守的キリスト者の陣営においても、新宗教右翼の主張が全面的に支持されているわけではない。エヴァンジェリカルの64パーセントはある特定の状況のもとでの中絶は認められるべきであると考えており、5パーセントは中絶を完全に自由にすべきであるとさえ考えている。新宗教右翼が主張しているように、中絶の絶対禁止を支持する者は31パーセントにすぎない⁴³⁾。

新宗教右翼の外交問題についての主張も、保守的キリスト者陣営において支持を得てはいない。良心的エヴァンジェリカルを代弁していると言える Billy Graham は伝統的な魂の悔い改めとともに、最近では反核や世界の飢餓の問題を伝道集会での説教の中心にすえている。南アフリカ政府支持や核を含む軍備増強などの新宗教右翼の主張は、エヴァンジェリカルから完全に支持されていない。

ここ数年、アメリカ最大のプロテスタント教派であり、エヴァンジェリカルの立場を代表してきた南部バプテスト連盟において、2つのグループによる激しい勢力争いが続いている。表面上は聖書解釈における直解主義をめぐる神学的対立という形をとっているが、本質的には多様性 (pluralism) に対する姿勢をめぐる争いである。すなわち、エヴァンジェリカル内部における意見の多様性を容認していこうとする穏健派と、新宗教右翼の主張以外は認めず、政治に対して積極的に参加すべきであるとするグループとの対立であり、現在、2つの陣営の勢力は拮抗している⁴⁴⁾。以上の例が示しているように、新宗教右翼の立場はアメリカの一般世論ばかりでなく、保守的キリスト者内部においても完全な支持を得ているわけではない。

このような状況の中で、テレビ説教家のチャンピオンとも言うべき Pat Robertson が1988年の大統領選挙に、共和党から出馬することを表明した。二期目を終るレーガンは次の選挙には出馬できないわけで、レーガンに代る新宗教右翼の利益と価値観を体現し代表することのできる候補者が見あたらない以上、Robertson 自身が出馬して、神学的立場をこえて新宗教右翼を連帯させ、あわよくば南部バプテスト連盟のエヴァンジェリカルをも巻きこんで、政治的発言力を増そうとする企てであると思われる。個性の強いテレビ説教家たちが

Robertson を一致して支持していけるのか。またエヴァンジェリカルの広範な支持を受けるために、Robertson は新宗教右翼の主張をある程度変化させて、妥協点を探るつもりなのか。これらはいずれも、現時点においては予想しにくい問題である。

お わ り に

ヴェトナム反戦運動と公民権運動とに結びついた対抗文化は、William G. McLoughlin が指摘するように「アメリカ文化の活性化」(revitalization of culture) のひとつの試みであった。⁴⁵⁾ メインライン教会の低迷の最大の要因は若者が教会を離れたことであつたが、それは若者にとってメインライン教会が、そこから自己の存在の意味を獲得することができる場所 (institution) となり得ていなかったからである。⁴⁶⁾ 若者の東洋宗教への傾斜は、そのことのひとつの帰結であつた。

東洋宗教以外に若者たちが向つた方向として、キャンパス・ミニストリーがあげられる。しかも、キャンパス・ミニストリーの大半はエヴァンジェリカルあるいはカリスマティック (ペンテコステ派) な教派によるものであつた。1970年に70パーセントであつた高校生の教会所属率は、1980年には86パーセント⁴⁷⁾ に上昇している。同じ時期はメインライン教会の低迷期であり、上昇した部分の大半は保守的な教派に吸収されたものと思われる。キャンパス・ミニストリーの中に新たな自己同一化の場を見つけることのできた若者は、保守的な教派の会員となつた者の他に、自分の母教会であるメインライン教会にもどり、メインライン教会内の保守グループを形成していった者も多かつた。⁴⁸⁾ メインライン教会の牧師に対する調査によれば、30歳以下の若い牧師の中に自分の立場を保守派 (conservative) と答える者が多いことが明らかになっている。⁴⁹⁾ これは上に述べたような背景を持っているのである。

メインライン教会の若者が東洋宗教と保守的キリスト教へと向つたという事実は、一見矛盾するように思われるが、構造的には類似した行動であつたと言えるのではないだろうか。すなわち、彼らはメインライン教会に欠如していた「直接性」を求めたのである。今日のメインライン教会の現状は、1970年代の

低迷期と比べて変化しているとは思えない。個人のレベルにおいて直接的な霊的救いを与えられているわけではなく、また新しい時代のためのパブリック・フィロソフィを提示できているわけでもない。メインライン教会の指導者層は別にして、現実の個別の教会は特定の社会階級 (social class) や排他性の強い地域コミュニティのための教会でありつづけている。

メインライン教会がこのような状況にある間は、テレビ教会は今後も人びとの内的欲求を満たすためのバイパスとして、まだしばらくは現在の勢力を維持していこう。しかし、所詮、テレビ教会は真実な意味でのコミュニティではなく、また教会ともなり得ない。テレビ教会は再生 (born again) への招き入れと、新宗教右翼的な政治・社会問題についての主張はするものの、個人個人の置かれている状況と魂の多様性と独自性を配慮するような牧会を行なうことは不可能である。テレビ教会の視聴者は電話によるカウンセリングでテレビ教会に結びついているようではあるが、電話の相手はその度ごとに違うわけで、そこには人格的なつながりは形づくられない。テレビ教会の視聴者は擬似的な一体感を持たたとしても、やはり孤立化しており、信仰理解においても、教会という共同の場で行なわれないために、個人主義的なものにならざるを得ない。Robert Bellah は教会の中にとどまりながらも教会の信条には拘束されず、独自の信仰理解を持つという「宗教的個人主義」(religious individualism) が、今日のアメリカの宗教状況のひとつの大きな特徴であると述べているが、これはテレビ教会の場合にもあてはまるのではないだろうか。⁵⁰⁾

McLoughlin は1978年の段階で、1960年以降の現在をアメリカにおける第4次信仰復興の時代となるだろうと予測した。⁵¹⁾しかし、対抗文化もテレビ教会も新宗教右翼も、またメインライン教会も、これまでの信仰復興運動に特徴的であった広範で持続的な個人の生活様式の変革と社会変革への情熱を生み出してはいない。対抗文化は自己完結的な閉鎖性の中に退き、新宗教右翼は復古主義を主張し、メインライン教会は自己保存本能だけの存在となっている。もし、アメリカのキリスト教会に将来があるとすれば、それは分断された社会あるいは世界を結び合わせていくという課題に取り組んでいく所以外にはないだろう。それは教会のひとつのプログラムとしての取り組みではなく、生活様式

の変革と社会変革をともなったものでなければならない。ワシントンD. C.の信徒レベルの信仰コミュニティである「寄留者たち」(Sojourners)は、信仰理解においてはエヴァンジェリカルの立場に立ちながら、今日の社会におけるキリスト者と教会のあり方を摸索している人びとの群である⁵²⁾。このような真剣な生活様式の変革を含む信徒運動が、少しづつではあるがアメリカの各地におこりつつあると聞いている。このような運動の中から、教会のあり方への反省とともに、キング牧師が投げかけた「アメリカの夢」すなわち「アメリカの理想と課題についての宗教的省察」(civil religion)への反省と新しい時代状況のもとでの再解釈があらわれてくる時、その時、アメリカにとっての第4次信仰復興が始まるのではないだろうか。

注

- 1) *TIME*, September 2, 1985.
- 2) *Christianity Today*, February 7, 1986, p. 60.
- 3) 拙論「ファンダメンタリストの政治化現象——1980年代の『新宗教右翼』の研究」、『同志社アメリカ研究』第20号(1984)参照。
- 4) *TIME*, February 17, 1986. ただし、日本向けの *TIME* の表紙は別のものであった。
- 5) *Ibid.*, p. 62.
- 6) Harvey Cox, "The Kingdom of God in America: The Influence of Religion in the USA Today," (A Paper for the Japan Society for American Studies), p. 4.
- 7) Mitford M. Mathews, ed., *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles* (Chicago: University of Chicago Press, 1951), p. 1019. See Martin E. Marty, *A Nation of Behavers* (Chicago: University of Chicago Press, 1976), p. 52.
- 8) 拙論「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」、『基督教研究』第46巻第2号(1985), 67-72頁参照。
- 9) James M. Wall, "Religion and Politics: 1960-1980," *The Drew Gateway*, Vol. 52, No. 2 (Winter, 1982), p. 14.
- 10) 例えば、キャンパス・クルセード、インターヴェンシィティ運動などがこれである。See Richard G. Hutcheson, Jr., *Mainline Churches and the Evangelicals: A Challenging Crisis?* (Atlanta: John Knox Press, 1981), pp. 62-79.
- 11) *PRRC Emerging Trends*, Vol. 7, No. 7 (September, 1985).
- 12) Hutcheson, *Mainline Church and Evangelicals*, p. 74.
- 13) Leon McBeth, "Fundamentalism in the Southern Baptist Convention in Recent Years," *Review and Expositor*, Vol. 74, No. 1 (Winter, 1982), p. 100.
- 14) See Marty, *Nation of Behavers*, p. 69.

- 15) George Gallup, Jr., "50 Years of Gallup Survey on Religion," in: *Religion in America, 50 Years: 1935-1985* (The Gallup Report, No. 236, May, 1985), p. 11.
- 16) Robert N. Bellah, et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life* (Berkeley: University of California Press, 1985), pp. 237-238.
- 17) *Religion in America, 1935-1985*, p. 42; *Religion in America, 1982* (Princeton Religion Research Center), p. 103.
- 18) *Religion in America, 1935-1985*, p. 18.
- 19) *PRRC Emerging Trends*, Vol. 7, No. 8 (October, 1985), p. 5.
- 20) *Religion in America, 1979-1980* (Princeton Religion Research Center), p. 46.
- 21) マリファナの使用を認めるもの: 18-29歳で28パーセント, 30-49歳で12パーセント; フリー・セックスを許容する者: 18-29歳で46パーセント, 30-49歳で24パーセントであった。See *PRRC Emerging Trends*, Vol. 3, No. 1 (January, 1982), p. 2.
- 22) 13-18歳を対象にした調査によると, マリファナの使用を認める者は11パーセント, フリー・セックスを許容する者は59パーセントである。See *PRRC Emerging Trends*, Vol. 7, No. 8 (October, 1985), p. 5.
- 23) Ibid.
- 24) 飯沼健真『アメリカ: 新保守主義の時代』(三省堂, 1983), 28-37頁参照。
- 25) Richard John Neuhaus, *The Naked Public Square: Religion and Democracy in America* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1984), p. 75.
- 26) *TIME*, September 2, 1985, p. 55.
- 27) Harvey Cox は1963年より1970年まで, ポストンの黒人居住区のロックスベリーで生活したが, 「私はただの客だった」という思いを持って, その地を去ることとなった。See Harvey Cox, *Just as I Am* (Nashville: Abingdon Press, 1983), p. 113. この書は魅力的で感動的な Cox の信仰的自伝である。
- 28) Neuhaus, *Naked Public Square*, pp. 234-237.
- 29) *Religion in America, 1935-1985*, p. 13, p. 27; George Gallup and David Polling, *The Search for American Faith* (Nashville: Abingdon Press, 1980), pp. 79-81.
- 30) 拙論「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」, 68頁参照。
- 31) 前掲論文, 69頁参照。
- 32) *TIME*, February 17, 1986, pp. 62-67.
- 33) *Religion in America, 1935-1985*, p. 38.
- 34) *TIME*, September 2, 1985, p. 50.
- 35) The Gallup Organization, Inc. and Princeton Religion Research Center, *George Gallup Polls America on Religion* (Christianity Today, 1981), p. 53.
- 36) See Richard Hofstadter, *Anti-Intellectualism in American Life* (New York: Knopf, 1963).

- 37) Charles L. Harper and Kevin Leicht, "Religious Awakenings and Status Politics : Sources of Support for the New Religious Right," *Sociological Analysis*, Vol. 45, No. 3 (Winter, 1984), pp. 341-342.
- 38) *Ibid.*, p. 351.
- 39) *PRRC Emerging Trends*, Vol. 8, No. 5 (May, 1986), p. 2.
- 40) Neuhaus, *Naked Public Square*. pp. 239-241.
- 41) *Ibid.*, p. 242.
- 42) 注26) 参照。別の調査によると、これを支持する者は74パーセントである。See *PRRC Emerging Trends*, Vol. 6, No. 4 (April, 1984), p. 5.
- 43) *George Gallup Polls America on Religion*, p. 55.
- 44) 南部バプテスト連盟の牧師の3.3パーセントが、モラル・マジョリティのメンバーである。新宗教右翼を支持する南部バプテスト連盟の牧師は42.6パーセント、不支持は46.6パーセントである。See Robert C. Liebman and Robert Wuthnow, ed., *The New Christian Right: Mobilization and Legitimation* (New York: Aldine Publishing Co., 1983), p. 119.
- 45) William G. McLoughlin, *Revivals, Awakenings, and Reform: An Essay on Religion and Social Change in America, 1607-1977* (Chicago: The University of Chicago Press, 1978), pp. 196-211.
- 46) See Dean M. Kelley, *Why Conservative Churches Are Growing* (New York: Harper and Row, 1972).
- 47) Hutcheson, *Mainline Churches and Evangelicals*, p. 58.
- 48) *Ibid.*, pp. 59-60.
- 49) *Christianity Today*, May 23, 1980, pp. 27-29.
- 50) Bellah, *Habits of Heart*, p. 228.
- 51) McLoughlin, *Revivals, Awakenings, and Reform*, pp. 179-216.
- 52) 彼らは月刊誌 *Sojourners* を発行している。このコミュニティが目ざしている内容については、*Sojourners* のリーダーである Jim Wallis の *The Call to Conversion: Recovering the Gospel for These Times* (San Francisco: Harper and Row, 1981) を参照。